

国語音声学入門以前の困惑

内田 英一

ある朝大学への出陣日にスクール・バスへ急いでいると、ふと目に付いた喫茶店の入り口に「本日は、閉店しました」と出ている。時に、午前八時四五分。

ある晩遅く築港街の地下道を歩いていると、戸の閉まった食堂の店先に「準備中」と札が掛かっている。まさか準備のでき次第、深夜営業をするわけでもあるまいに……。

一軒の写真屋の前を通ったら「パスポート、写します」と紙がはってある。パスポートなんか写してもらって、どうするのだろうか。これらは文字言語のヘンテコな例だが、捜せばこんなものは幾らでもある。ことにほとくの本業の音声言語となると、まったくひどい。余りにも、ひど過ぎる。

洋面のロード・ショウ劇場で休憩になったら

「皆様、これにて第三回の上映を終わりました。お知りのお方は

東側のトビラより、お忘れ物のなきようにお出まし下さいませ」と、放送が流れてきた。これは

「拙者、これより登城仕るに就き、くだんの件、呉れ呉れもお忘れ無き様に願ひ奉る。然らば、これにて御免仕る」というような「赤穂城断絶」時代の言葉だ。

前半だけ見損なっていた映画をやっている館があったので、はいって見たら

「ただ今から、上映致します。どなた様も、最後までごゆっくりと御鑑賞下さいませ」

とのアナウンス。はくは、後半はもう以前に見てしまっているのに……。

国鉄のある中間駅へ、はくはの乗っている各駅停車の国電が停車した。折から夕方の混雑時、駅のスピーカーが

「皆さん、お勤めご苦労様でした」

と放送している。ところがその日ばかりは昼間遊んでいて、これから仕事に行くのだ。

こんな話を学生にしたら、皆は

「先生はヘソ曲りで、ヘリクツだ。そんなこといちいち気にしていたら、何もしゃべれない」

と言う。確かに多くの人の気にならないことを洗い立てるばかりは、異常変質者なのだろう。しかし世の中で恐ろしいのは、そうした異常者なのだ。それだったら人びとは、毎夜戸締まりなどをしないで寝たらいい。そのかわり強盗にはいられても殺されても、文句をいわないことだ。そのほんの一握りの変質者に付け込まれたら、もうおしまいだ。言葉でも不特定多数相手の場合には、そうした一人を警戒するのがいちはん重要なのだ。そういう人間が、とかく鬼の首でもとったつもりで悪口を言いふらす。絶対に揚げ足をとられない、つまり余計なことを言わないのに限る。ただでさえ様ざまな音響のうるさい昨今、言っても言わなくてもいいことは言わないほうが無難。音響、声響もほとんどにしたほうがいいだろう。

国鉄では、よく変な言葉を聞かされる。ある場所に用事があった、その駅まで行く普通電車に乗った。電車がその駅に着いたら、駅員が

「この電車は、これまで。皆さん、乗り換え」

と言う。ほくはその駅で降りたいのに、赤字国鉄はもっと乗らせて少しでもうけたいみたい。

日本の代表駅、新幹線のホームで

「お降りの際には、お忘れ物のないように下さい」

こんな日本語文法は、なかったはずだ。

国鉄だけではない。私鉄でも……。車内放送で車掌が

「乗り越しその他御用がございましたら、間もなく車掌が車内をうかがいますから……」

日本語の助詞は、ややっこしい。

私鉄の急行で

「間もなく、〇〇駅の三番線を通過致します。車が少し揺れますから……」

乗客に、三番線が何の関係があるのだろうか。

「次は、ムコーガワまで止まりません」

車掌に

「鳴尾は武庫川のムコーガワですか、こっち側ですか」

と言ったら、何を言われているのかさっぱり分らないらしく張り合

がない。関西では、長母音化が強い。京都の人に

と尋ねると、ほとんどが

「キョートーシ」

と答える。教頭氏と錯覚する。

国鉄と近鉄とで会議をやっている時に、駅の話題がトンチンカンになった。国鉄では、次の駅のことを「次駅」といい、近鉄では、自分の駅のことを「自駅」と呼ぶ。

台風の余波が残る日に、浜大津へ行つた。

「ショー・ボートはケッコーします」

と大声でどなっている。風で「欠航」かと思つたら

「お早く、御乗船下さい」

つまり「決行」なのだ。

長らく会わなかった友人に、ばったり往来ですれ違った。

「しばらくだなあ。五年振りかな？」

またある日電話で用事のある相手を呼んでもらつたら、先方が

「しばらく、お待ち下さい」

と言つた。このまま電話口で、五年も待たされるのではないだろう。いったい「しばらく」とは、どの位の長さをいうのだろうか。木当に、日本語はむずかしい。

百貨店でエスカレーターに乗ったら

「エスカレーターにお乗りの坊っちゃん、お嬢ちゃん」

と、上から声が聞こえてきた。見ると、乗っているのはぼく一人。

お坊っちゃんはいるが、お嬢ちゃんはいない。テープ放送の無責任な使用例だ。テープの乱用については色いろといわれているが、本元の放送界でもおかしなことがある。充分に準備練習を重ねて、いざ録音録画用のテープが回わり出して本番となる。それなのに途中で出演者が舌でもかむと、自分で

「済みません。採り直して下さい」

とやめてしまうのだ。テープへの甘え、本番の採り直しとは、どういふことなのだろう。言葉は、生で鍛えられなくては駄目だ。

放送が言葉の面では社会に及ぼす影響は、想像以上のものがある。悪い言葉は千里を走り、悪貨はたちまち良貨を駆逐する。ドラマなど

「あなた、なにゆってんのよ」

というようなセリフは始終だ。映画でも同じ。監督は、何をしているのだろうか。丸マゲを結っているわけではなく、言っているのだ。小学校の子供に、「言う」のカナを振らせると、半数が「ユ」と振る。一般人の会話でも「ゆった」「ゆって」が非常に多い。もし「言」が「イ」でなく「ユ」になってしまったのなら、過去型や連用型が「ゆった」「ゆって」になって当然だが、ぼくはまだ不幸にしてそんな改定の話聞いたことがない。もっと不思議なのが「良い」だ。

これはいうまでもなく「よい」であるのだが

「あの映画、よいよ」

「そのハンド・バッグ、よいわね」

なんていう会話は、まず耳にできない。だれもが「いい映画」「いいわね」と言う。だが「ヨ」が「イ」に変わってしまったのなら、過去型などはどうなるのだろうか。

「あの映画、良かったわよ」

になるはずだ。そういえば数年前に浅草のコメディアンが「良い」の現在完了型だと説明して盛んに「いかっちゃったわねえ」と連発していたが、なるほどそういう言葉も理論的には存在するわけだ。

少しも疑問を感じずに平気で使われている奇妙な言葉は、他にも限りがない。例えば「まず、初めに」とか「後で、後悔する」などは、いずれも「赤い顔して、赤面する」類だ。食堂その他の場所では、常に「相席を……」という言葉が使用されているが、ほくが闊べた限りの辞典では「相席」という言葉は掲載されていない。ほくはイジ汚ないので食事も一粒残さずに食べてしまうが、レストランで

「おさげして、よろしゅうございますか」

と聞かれることが多い。いやな気分だ。いくらほくでも、皿までは食べられない。慣用化して無反省に口から出る言葉は、なんとも後

味が悪い。

今ここで方言にまでふれる余裕はないが、身近かな例を一つだけ。百貨店の出入口に

「指つめに、御注意下さい」

とビラがはってあった。東京方面からきたらしい学生が二人

「ヤクザじゃあるまいし、デパートへきて指つめるかよ」

と、笑っていた。

近ごろ日本語の乱れがようやく各所から叫ばれるようになってきたが、その中でほくがもっとも気に掛かる問題は「敬語」と「外来語(?)」とだ。敬語に就いてはほくも数十年このかた闊べてきてかなりの資料も集まっているので、機会があればその詳細を發表したいとは思っている。ここでは、その一部を書いておく。

ほくが三年前膠原病(こうげんびょう)で一年近く阪大病院に入院中、まいにち耳にしていた院内放送

「〇〇先生、至急皮膚科まで御連絡して下さい」

という内容だ。何となく引掛かるのだが、どうしてもどこが間違っているのか分らない。それが退院間際になって、敬語の「格」のためではないかと気が付いた。つまり「御連絡」を受ける場合は「して」ではなく「なさって」でなければ「格」が不均衡になる。「御連絡なさって」か「連絡して」でない、間違になるはず

だ。別の例でも「いい」なら「です」で「よろしい」なら「ございます」となる。「いいです」か「よろしゅうございます」でないと、格が合わない。けれど実際には「よろしいです」が大半の人たちによって使われている現状だ。

ある食堂で接客係が大きな声で

「お三人様、どうぞ」

と言うのでよく見たら、子供連れのおばさんはいってきた。子供が二人いるから計三人には違いないが、もっと立派な大人が三人はいってきたら何と言うのだろうか。無意味な二重敬語、平生からあんまり最大級の言葉を使い慣れてしまうと、いざという時に使う言葉が無くなってしまう。これなどどんな人に対しても「お三人」か「三人様」でいいのだ。またこれは敬語ではないが「第一回目」というのもおかしな使い方。「第一回」といったら「目」は付ける必要がなく「二回目」といったら「第」を付けてはいけないはずだ。前のほうで国鉄の放送の職員が「お勤め、ご苦労様」と言う例をあげておいたが、もともとこの「ご苦労」という言葉も、上の者から下の者に向けて言う言葉だと思ふ。だが現在では、目下が平気で目上に対して「御苦労様」と言っている。

椅子が一〇脚程ある理髪店にはいったら、とたんに調髪中の店員全員がぼくのほうを見て

「いらっしゃいませえ」

と、どなった。一人でも客が帰る時には

「ありがとうございました」

と、これまた全員の合唱だ。よくよく注意してみたら真ん中に店主がいて、彼の音頭で他の調髪士一同が前記のように発声するのだ。中に一人でもうっかりしてどなりそびれると、たちまちジロリとその者を店主がにらみつける。それはともかく人間しゃべっている間、だれしも手がおろそかになる。だから戸口に向ってどなっている間は、いま自分が調髪中の手が瞬間的に止まる。客にしてみればそんな口先だけのあいさつよりも、黙って真剣に調髪をしてもいい。他の客の出はいりの度に五分に一回もの割合で、横を向かれて顔をそらされていたのではカミソリがチラチラして気が気ではない。

数年前ハワイのマウイ島でハレアカラへ登るために、在住二世日本人の世話になった。彼が運転する車に乗って山頂に向う途中、なぜか彼はあまりぼくに口をきかない。ぼくがその理由を彼に尋ねると

「あなたは言葉の先生だそうだが、わたしはハワイにくる前の小学校時代を会津の若松で過ごした。今でも会津弁がぬけないので、あなたの前ではとても恥しくて話しができない」

という次第なのだ。ところが彼は、とても見事な日本語を話すので、ぼくは大いに感心した。そこで

「何を言うんですか。あなたみたいに奇麗な日本語を話す人は、今の日本でもなかなか見付かりませんよ。現在の日本語の乱れというものは、あなたの想像できるようなものではないんですよ」

「そんなに、ひどいんですか。そういうえば、先日こんなことがありました。ある日本からの観光女性たちをやはり車で御案内した時、一人の婦人が「あの、この附近にオトイレありませんか」と聞くんですね。わたしには、何のことかさっぱり分りませんでしたよ」

そうだろう。異郷にあって美しい正しい生きた日本語を守ろうとしている人に、英語の「TOILET」を半分にたたき切つて、それに無意味な丁寧言葉の接頭語「お」を付けたまことに不可思議な単語が理解できるわけではないだろう。

「トイレ」を嘆くまでもなく、現代日本語にカタカナ、外来語の横行はちょっとやそつとの様相ではない。どこの国からきた言葉なのか「L」か「R」か「B」か「V」かもお構いなし。肝心の外国人が聞いてもまるで分らない言葉ばかり、ほとんどが国籍不明の和製外来語だ。正しい原語通りのものは少なく、正しい使い方のものも少ない。発音が日本語的に変ってしまうのは仕方がないにして

も「TV」を「テレビ」と言うのなどはやはり困る。つり銭のことを「バック」(正しくはチェインジ) 自家用車を「マイ・カー」(プライベート・カー) 他、目に余るものが多い。「ナイター」も日本製だが、近ごろはアメリカでも「ナイター」という米語が使われ出したとか……。日本語の混乱の中で、外国語まで作成して輸出する日本人という民族が分らなくなる。

また一方ではディスク・ジョッキーといわれる人が

「この演奏は、たいへんムーディですよ」

とラジオで話していた。辞書で「ムーディ」を引いてみたら「気むずかしい」「怒りやすい」と出ている。これではレイモン・ルフェイヴルもポウル・モウリアも、さぞかし苦笑していることだろう。

喫茶店では大概の人が「ホット」と注文する。すると、コーヒーを持ってくる。いったいどんな辞典に「ホットとは、コーヒーのこと」と書いてあるのだろう。夏場なら冷たいコーヒーとの区別からホットもうなずけるのだが、それが一年中ホットなのだ。そうなること「ホット・ミルク」や「ホット・レモン」などはどういうことになるのだろうか。

「甘党喫茶、近日オープン」

と、広告が出ている。日本独特の飲み物「しるこ」などにオープンもないだろう。

重病を抱えた人が「クリニック」と看板の出ている建物の前で

「医者ほ、どこだろう」

と途方に暮れている漫画を見た覚えがある。

東北の温泉旅館の玄関でおばさんたち数人が

「あすは、お昼ごろここを出たいんですが……」

と言うのに対して、番頭が

「チェック・アウトは、午前一〇時なんです……」

と返事している。おばさんたちは、ただぼんやり立っているだけ、

外国人も泊る大都会の一流ホテルではないのだ。ある名店街の和食

堂にはいった時、七〇才近いでっぴりとした主人がニコニコと迎えてくれた。

と頼むと、そのおじさま

「親子どんぶりを……」

と頼むと、そのおじさま

「親子どんぶり、ワン」

ときた。ぼくは不愉快になったので、食わずに出てきてしまった。

明治生まれの男が日本料理に、横文字を使う必要があるのだろう

か。それも正しい文法なら「ワン・オヤコドンブリ」となるはず

だ。日本語で「親子どんぶり、一つ」とでも言ったら、何かバチで

も当たるのだろうか。いやな気分ですバス道に出たら「ワンマン・カ

ー」が走って行った。

将来性にあふれた優秀幹部社員の話聞いて、涙の出る思いになった。

「この問題はだなあ、今のペースをくすさずによく神戸サイドと東京サイドとでディスカッションして、何かのメリットがあると分たらケース・バイ・ケースでスタートするんだなあ」

明治鹿鳴館時代の舶来崇拜精神が、今も堂どうと生きている。

だが音声言語を感覚的にとらえようとする風潮の強い現代の若者たちにとっては、たしかに英語のフィリングのほうが形式的な日本語よりもとつきやすいだろう。この文の初めにあげた例の「本日は、閉店」や「準備中」にしても、英語ならただ一字「CLOSED」で済んでしまう。けれど日本語で「閉店中」とか「休店中」とでも書いたら、何だか店じまいしてしまったような意味にとられる。言葉数の豊富な日本語では、かえってことという時にふさわしい単語を捜すのに苦労する。前記の例なども日本語なら

「営業時間、平日は午前九時から午後七時まで。土曜は午後三時まで。日曜は定休日」

のように長ながと説明文でも書いておくしか手がないだろう。

こんなつまらないことを書き連ねていたら、まったくラチがあかない。

ぼくはもともとNHKのアナウンサー出身で、けっして学者では

ない。しかし在職中もその後二八年間の講師生活でも、ぼくはぼくなりと言語学の研究は続けてきたつもりだ。本当は「アクセントの平板化傾向」とか「母音の無声化がアクセントに及ぼす諸関係」等を本誌に掲載する予定でいたのだが、さて原稿用紙を目の前にしてみると自分でも不思議なくらいに違った内容を書き出してしまった。

もとよりこれはおよそ論文などとは、似ても似つかないシロモノだ。おそらく甲南国文にこんな駄文の載ることは、空前絶後のできごとだろう。それを自ら百も承知していながら、あえてこれを書いておきたい気持ちはどうしても抑えることができなかった。諸兄姉のおしかりは充分に覚悟の上で、自分の信念に踏み切った次第だ。

前にも学生たちからぼくが「ヘソ曲り」と笑われたことを書いたが、世の中で何よりもいちばんこわいのは「こんなことぐらい……」と見過ごしてしまう態度ではないだろうか。細かい小さなことをないがしろにしていると、いつの間にか大きなことも気が付かなくなってしまう。これはすべてのところで、いつもやかましくいわれることだ。

ぼくがある民間放送の担当部長に

「このころはアナウンサーでも一般の司会者でも、会話の時にわざと無意味な接頭音の「エー」を付ける傾向が増えて聞き苦しいで

すね」

と話す

「それはあなたがアナウンサー出身だから、つい気になるんでしようよ」

と、てんで相手にしてくれない。

ぼくの父は医者だったが、そのオヤジがいつも悲しんでいたのは「手遅れの患者」のことだった。

「なぜ、もっと早くきてくれなかったのだろう」

と……。けれども当人にその気のない者を、ムリヤリ首に縄を掛けて病院へ連れてくるわけにはいかない。馬にでさえ、飲みたくない水を飲ませることはできないのだ。

食事のあと、少し胃がチクチクする。そのうち医者に診てもらおうと思っても、その程度の痛みは慣れてしまうとあまり気にならなくなってくる。そのまま二年も立って、突然吐血する。びっくりして、病院へ駆け込む。

「ひどい胃潰瘍（いかいよう）です。すぐ、手術しましょう。でもこんなにひどくなる前、何か自覚症状はなかったんですか。その時なら、薬で治ったでしょうに……」

と、医者も残念がる。手術しても治ればいいが、ヘマすればそれで一回の終わりになってしまうかもしれない。

さて今の日本語、お話にもならない重症だ。早く手術しなければいけないのに、まだだれもが病氣そのものにさえ気が付いていない。いま最大の急務は一億二、〇〇〇万人の日本人に、その病状を自覚させることだ。そのためには胃のチクチクの痛み、つまらないように思えても細かい小さな間違いに対して、まず各人が疑問の心を持つことでしかない。

ところで大学の国語音声学で共通語のアクセントや音声学的美点の諸法則、五〇音の正しい舌の位置や口の開き方など発声発音上の辨義指導をすると、皆よく理論的なことは分つてくれる。けれど実際その通りに発声発音することは、たいへん困難だ。その結果、熱心な学生ほど

「日本語のすばらしさ、その音声言語学の整然とした法則、そしてそのむずかしさはいやというほど理解できませんでした。でも大人になつたわたしたちに、いまさらその通りにしゃべれなんていうことはとてもムリな話です。なぜもっと早く、子供のころから教えてくれなかつたんですか」

と大声で訴えてくる。まったく、それに違いない。これは欧米諸国のように運動神経の発達する言語形成期、四才位から一〇才位までの間に指導しておかなければいけないのだ。その年ごろなら、だれでもが簡単に打てば響くように覚えてくれる。それが大人になると、

理論的になって感覺的には身に着かなくなってしまう。音声言語は理屈ではなく、日常の生活手段なのだ。それをいちいち発声発音を考へながら会話していたのでは、どうにもなりはしない。

国語音声学の基本を大学で初めて教える、いったいそんな文化国家が他にあるだろうか。外国なら小学校にはいる前、各家庭で教え込む。それをさらに義務教育で充分に指導しているのだから、その国の国語を正しく発声発音できない困民なんて者は存在しないのだ。すべては、日本の国語教育の在り方にその原因がある。

外国の辞典で発音記号の書かれていないようなものが、いったいあるのだろうか。日本の辞典でその付いているものを、ほくは二種類しか知らない。他に、どのくらいあるのだろうか。この事實は、日本では辞典はみな「文字言語」のためだけにあるのであって「音声言語」はどうでもいいということを示している。

明治このかた日本の国語教育はどのようにして文字を「読」み「書」き、文を「作る」かということだけに専念して、今日に至っている。今ここで音声言語と文字言語とのいずれが言語そのものの本体でいずれが影かという分り切ったことを述べる気持ちはないが、日本の国語教育が終始一貫、影だけを追っている事実を否定することはできないだろう。本末転倒も、はなはだしい。言葉は「言」が「文」に一致するもので、つまり「言文一致」で「文言一致」で

はない。主従の關係を見失ってしまった國語教育に、一時も早く目を覚ますことだ。

だがこうした問題は文部省、國家、國民が自覚指導すること、
ほく一人がどんなにどなり散らし、グチをこぼし、文句を言ったところで始まらない。ほくも、年をとってきたくたびれた。

だが幸いなことにほくが甲南女子大學で担当してきた「國語音声学」は、教職必修課目なのだ。教え子の學生たちが卒業して將來学校の教師になった時、今のほくと同じ悩みを持って生徒に向う先生には絶対になつてもらいたくない。この教え子に教わつた子供たちがまた何年か後に大學生となつた際、いまほくの目の前にいる大學生と同じ悩みを持つ學生になつては絶対にいけないのだ。ほくはただこのことだけを念願して、毎週この大學の教壇から叫び続けてきた。

さて本學でのほくの國語音声学の説明文は、毎年同じ文章で始まっている。

「日本人ぐらい、自分の國の言葉を受さない人間はない。日本人ぐらい、自國語を知らない者もない」

しかしそれから七カ年間、ほくのこの信念は柔らくどころか、ますます強化されている。そのことは日本語を愛し続けている一人の學徒として、まったく残念なことだ。本當にくやしいけれど、それ

が現在のほくの心境なのだ。

いずれにしてもこんな場違いの拙文で、甲南國文の歴史を汚したことを深くおわびする。